

第7回企画展

神道無念流 宗家戸賀崎家



初代戸賀崎熊太郎暉芳肖像

久喜市公文書館

平成9年8月25日(月) ~ 10月5日(日)

開催にあたって

神道無念流が創始された江戸時代中葉の剣術界は、まだ一般庶民を対象とした新興流派の勢力は弱く、古くからの伝統をもつ既成流派の時代でした。関東では上野国の馬庭念流が隆盛を誇り、江戸では中西派一刀流の中西忠蔵子武と直心影流の長沼四郎左衛門などにより防具や竹刀が考案され、練習法に一大変革がもたらされました。

武士階級が既成の流派で剣術に取り組んでいたころ、地方では次第に農民の階層分化が激しくなり、武蔵国一帯で百姓一揆が頻発するようになりました。これらから身を守ろうと、特に富農や富商たちは自衛手段として剣術を学ぶようになったのです。

今回の第7回企画展では、こうした剣術が流行する土台の中で誕生した神道無念流について紹介することにいたしました。初代戸賀崎熊太郎暉芳により発展の礎が築かれた経緯や流派継承者代々の功德、また、その主な高弟達、さらに水戸藩との関わりなどについて展示しております。

神道無念流が日本国中にその名を馳せ、多くの有名剣客を輩出した点は、特筆に値するものです。これらの剣術関係資料の多くが宗家戸賀崎家に伝えられ、市の文化財に指定されています。

最後に、本企画展を開催するにあたり、貴重な資料を提供してくださいました関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成9年8月

久喜市公文書館長



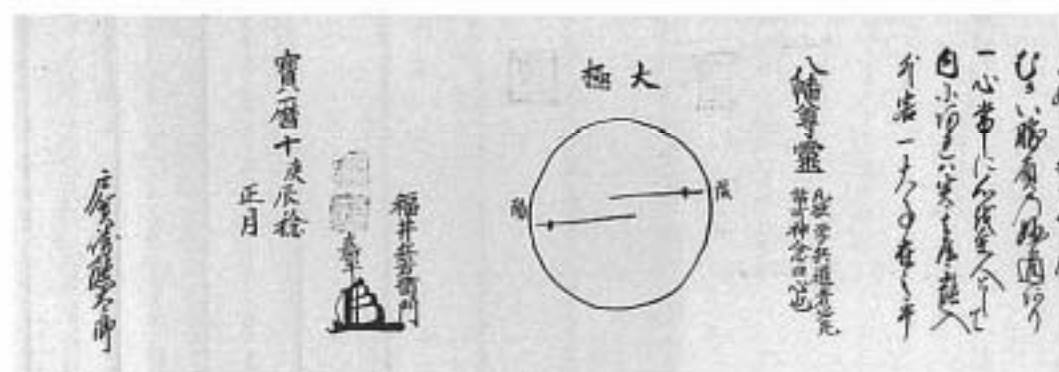
21 神道無念流戸賀崎氏練武遺跡 埼玉県指定文化財（旧跡）

神道無念流と戸賀崎家

神道無念流の創始者福井兵右衛門嘉平は元禄15年（1702）、下野国都賀郡藤葉村（現栃木県下都賀郡壬生町）に生まれ、幼名を川上善太夫と称し、当時下野国南部一帯に勢力をもっていた天神正伝神道流の流れをくむ一円流を牧野円泰に学んだ。その後諸国へ武者修行に出立し、よき師を求めて多年遍歴したが、自らの意にかなう人には出会えなかった。そのような折、信濃国戸隠山の飯綱の神が靈験あらたかであると聞き、信濃に行き神に祈り宿願を遂げようとした。こうして、この飯綱大権現に参籠すること50日、老人との不思議な体験をもとに剣の奥義を悟り、一派を立て神道無念流を称するようになった。そして、兵右衛門嘉平は元文5年（1740）38歳の時、四谷に道場を開き弟子をとるようになった。この弟子の中に有能な後継者、神道無念流発展の礎となった上清久村出身の戸賀崎熊太郎暉芳と出会ったのである。

戸賀崎家の祖先は、遠く新田義貞から出て一時は武州菖蒲領の戸賀崎城主となって戸賀崎を氏としたが、天正9年（1581）戸賀崎隼人義氏が清久にきて帰農し、隠れ郷士となった。その義氏から8世（一説には9世）が初代熊太郎暉芳であると伝えられている。武士の出という誇りから剣術に対する関心が高かった熊太郎暉芳は宝暦9年（1759）、福井兵右衛門嘉平の道場に入門し、同13年（1763）には21歳の若さで皆伝の印可を受けるに至り、神道無念流を継いで宗家となった。

戸賀崎家は、初代熊太郎暉芳以来5代150年にわたり家伝の業を継ぎ、多くの有名剣客を輩出した。また、幕末の3大流派の一つに数えられるほど隆盛を極め、神道無念流の名声を天下に知らしめたのである。



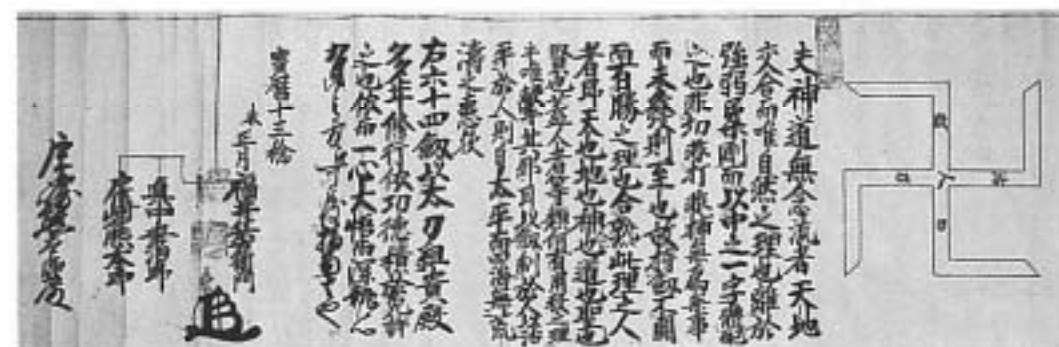
1 神道無念流免許目録 宝暦10年（1760）

流祖福井兵右衛門嘉平から初代熊太郎暉芳にあてた免許目録である。暉芳は、入門後僅か1年でこの目録を受けるまでになった。



3 福翁府君神道碑 天明8年（1788）

初代熊太郎暉芳が師の徳をたたえて建立したものである。福井兵右衛門嘉平の伝記や神道無念流の起源などが記されている。師について暉芳は、「人となり篤実で常に忠孝の心を存し、生来他の嗜好がなく、幼いときから撃剣を好んでいた」と表現している。



2 神道無念流免許皆伝書（暉芳） 宝暦13年（1763）

流祖福井兵右衛門嘉平から初代熊太郎暉芳にあてた免許皆伝書である。この中には、初代暉芳から2代胤芳に与えられた免許皆伝書もある。

初代戸賀崎熊太郎暉芳^{てるよし}



延享元年（1744）1月1日、元右衛門を父として上清久村に生まれた。16歳のとき江戸四谷の神道無念流流祖福井兵右衛門の道場に入門し、非凡な才能を発揮して免許皆伝を許されると、郷里上清久に帰り、邸内に道場（4間×8間32坪）を開設して近隣の子弟の指導にあたった。その後、諸国武者修業の旅に出て剣術を錬磨し、安永7年（1778）35歳のとき江戸裏二番町に道場を開いた。それから5年後の天明3年（1783）10月8日、熊太郎暉芳は神楽坂行元寺門前において門人の大橋富吉を助けて仇討ちを遂げさせ、一躍その武勇を高めた。これを「天明の復讐」と呼び、このときの発端、経過、模様などが『天明復讐実録』に記されている。これにより暉芳の名は江戸中に高まり、入門者が激増し、当時の門人は3,000

人を数えたといわれる。

寛政7年（1795）12月、18年間にわたる江戸での活躍に終止符を打ち、道場を高弟の岡田十松に託し、郷里の上清久に帰り「知道軒」と号し、郷村子弟の育成に専念した。

文化6年（1809）5月11日、66歳で剣一筋に生きた多彩な生涯を閉じた。法名は、「神授院大空暉芳居士」という。



4 天明復讐実録 天明4年（1784）

天明3年10月8日、江戸牛込神楽坂行元寺の境内において、下総国相馬郡早尾村出身の大橋富吉が、同村出身の甚内を父の敵として17年余りの苦勞の末に討ち果たした、世にいう「天明の復讐」を記したものである。この仇討ちに際し師の熊太郎暉芳は、いざという時に備えて高弟の松村源六郎、岡田十松、川島玄蕃、三田三五郎などを付き添わせ、富吉の本懐に手助けをした。

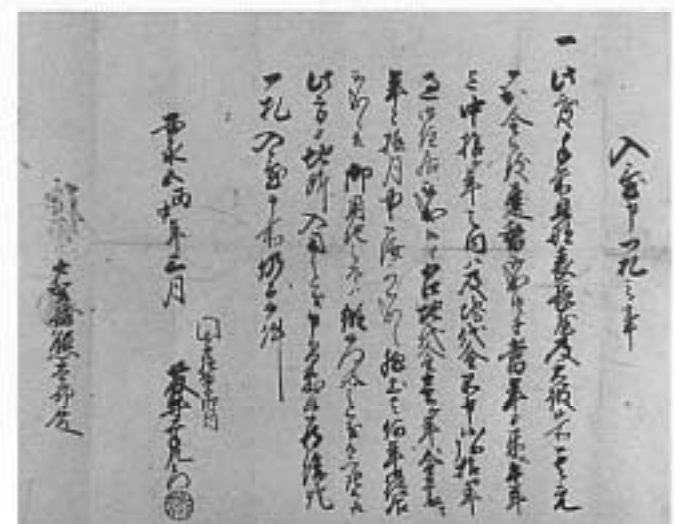
27 地代金取極一件 安永5年（1776）

旗本門奈孫市郎の表屋敷が大破した時、初代熊太郎暉芳が金子を出して建替えたことに対し、「これにより10ケ年は地代金を払わなくともよい、その後は地代金は1ケ年1両にて、毎年12月中に払ってほしい」ということを記したものである。



6 知道軒戸賀崎氏衣幘蔵碑 文政7年（1824）

3代芳栄が武者修業から帰ったあと、祖父知道軒暉芳、父有道軒胤芳の遺徳を偲んで建立した碑である。この碑の下には、衣幘（故人生前の正服と頭巾）が蔵められており、この習慣は中国に由来する。



たねよし
2 代戸賀崎熊太郎胤芳



安永3年(1774)2月2日、熊太郎暉芳の長子として生まれ、幼名を和一と称す。父暉芳が江戸の裏二番町に道場を構えた安永7年(1778)、4歳で江戸に移り、父をはじめ、その高弟達のもとで技を磨いた。

『皇国武術英名録』は胤芳について、「剣道ヲ研究シ、業夙ニ成ル、術亦天品ニ出ズ」と記述していることから推しても、剣技は親譲りの優れたものであったといえる。

寛政7年(1795)12月、父の帰郷と行を共にし、上清久の道場で父を助けて門弟の指導にあたるようになった。ときに、22歳である。その後、東海、東北の各地を遊歴し、剣技はさらに磨きがかかった。

文化6年(1809)5月、父暉芳が他界したので家督を継ぐと同時に「熊太郎」を襲名し、有道軒と号した。しかし、まもなくして病にかかり、余命幾許もないと察した胤芳は、高弟の中村万五郎と木村定次郎の兩名に神道無念流の伝書と、まだ11歳という年少の長男和一(3代芳栄)の後見を託した。

文化15年(1818)2月28日、45歳の若さでこの世を去った。法名は、「徳授院春光胤芳居士」という。



2 神道無念流免許皆伝書(胤芳)

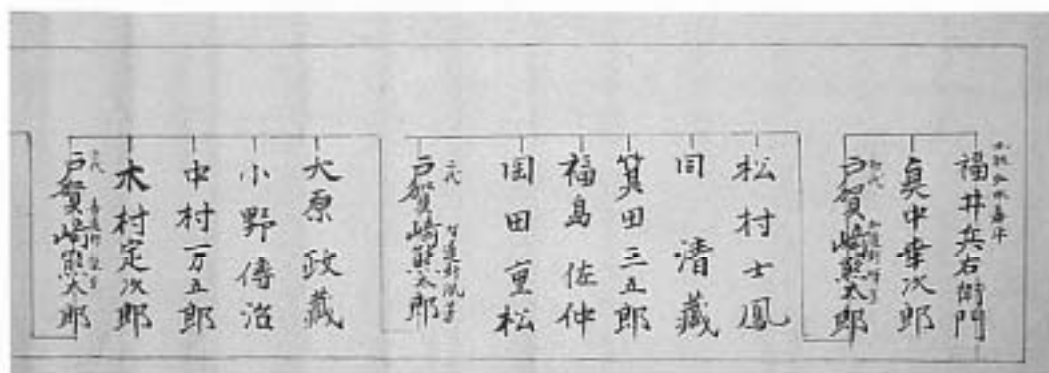
文化4年(1807)

初代熊太郎暉芳から2代熊太郎胤芳に与えられた免許皆伝書である。

5 戸賀崎和一後見二付書状

文化13年(1816)

2代熊太郎胤芳は、自分の病気が難病で生死計り難いことから、高弟の中村万五郎と木村定次郎の兩人に初代から受け継いだ神道無念流の伝書と、まだ11歳という年少の長男和一(3代熊太郎芳栄)の後見を託したものである。



15 神道無念流免許皆伝系譜

流祖福井兵右衛門嘉平にはじまり、初代戸賀崎熊太郎暉芳から4代熊太郎芳武までに免許皆伝を受けた者の系譜であり、直系のみ記されている。

3代戸賀崎熊太郎芳栄 よししげ



文化4年(1807)2月15日、胤芳の長男として生まれ、幼名を和一と称し、喜道軒と号した。幼少の頃から英邁で、剣の道にも学問にも秀でていたといわれる。

11歳で父を失った芳栄は、中村万五郎と木村定次郎の両後見人に師事して厳しい修業を積み文政6年(1809)、弱冠16歳で神道無念流の奥義を極めた。そこで中村・木村両後見人は、亡き師の胤芳から託されていた神道無念流の極意書を、清久の道場とともに芳栄に渡した。ここに、戸賀崎家剣3代を受け継いだのである。

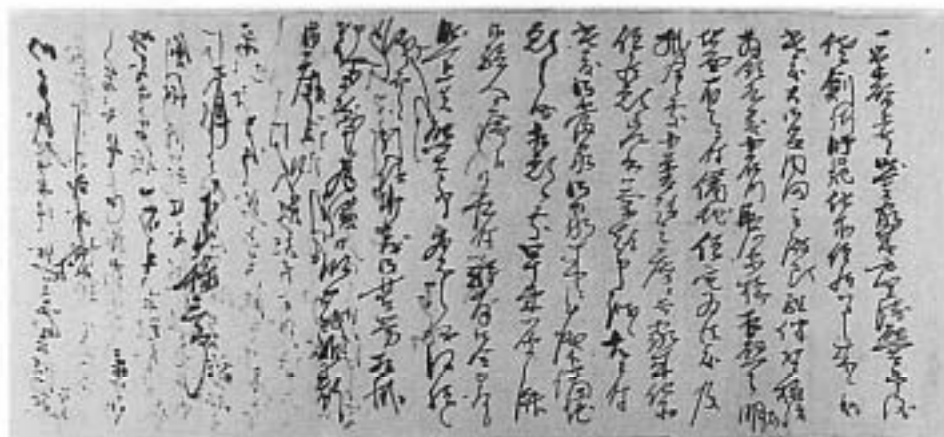
諸国武者修業から帰った天保12年(1841)、江戸牛込に道場を開設して門弟の育成を始めた。その後、芳栄の高名を耳にした水戸藩主烈公德川斉昭の強い要請により、水戸藩の客

分となり、5人扶持を賜り、剣術指南となる。のち50人扶持、上士に列せられ、水戸藩校弘道館が開設されると、世子小伝兼剣術教授に補せられた。水戸藩士の藤田東湖や桜田門外の変に加わった多くの武士も、芳栄の指導を受けたといわれる。さらに、道場を小石川に移してからは、剣術稽古のほかに時局政談の場となり、水戸藩論形成の一翼を担った。

文久4年(1864)1月23日、門人の宮本鹿太郎が父の仇河西祐之助を中山道で討ち果たした通称「一本杉の仇討ち」は、芳栄が後見人であったことから、祖父の知道軒同様、社会的に大きな影響を与えた。

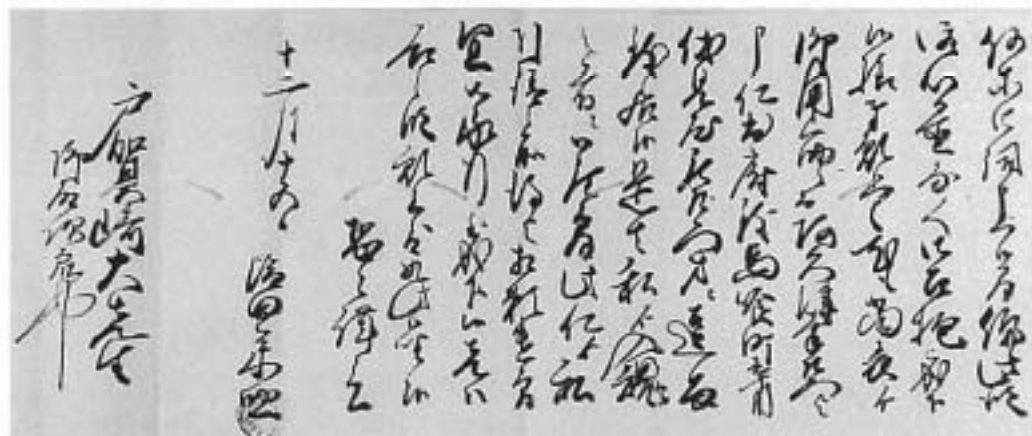
疾風怒濤の幕末期に回天の活躍を果たした芳栄は、戸賀崎家剣代々の中で最高の傑物であったといわれる。

慶応元年(1865)5月29日、59歳で他界した。法名は、「神徳院熊山栄芳居士」という。



13 道場敷地借用二付一札

安政5年(1858)5月に江戸本郷三丁目から小石川の舟河原橋(現文京区後楽二丁目)に道場を移した時の経緯を記したものである。



26 御奉公願

牧原勇之助の弟子入りについての入門許可願である。年号・宛名はないが、おそらく3代芳栄に宛てたものと思われる。



22 一本杉の碑

3代熊太郎芳栄のもとで父の敵をとるために剣術の修業を積んでいた水戸藩の宮本鹿太郎が、相手の讃岐丸亀藩の浪人河西祐之助を討って本懐を遂げたところである。中山道の松並木の中であって、周囲3メートル、高さ18メートルの一本杉が空高くそびえていた付近(現浦和市針ヶ谷3丁目)での仇討ちであったことから、「一本杉の仇討ち」と呼ばれている。

4 代戸賀崎熊太郎^{よしたけ}芳武

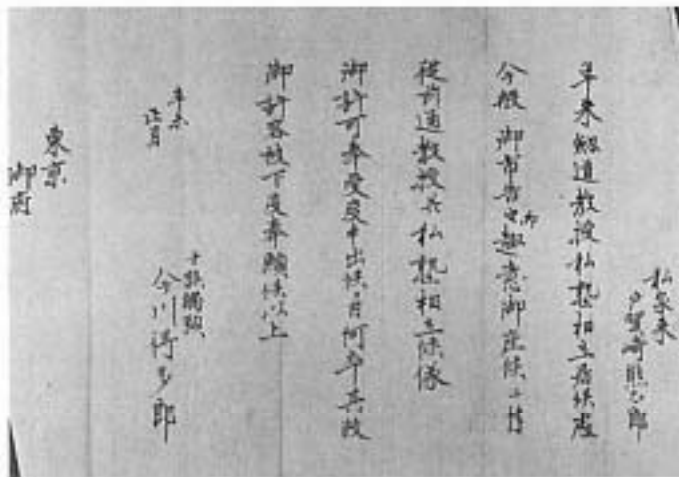


天保10年（1839）2月10日、芳栄の長男として生まれ、幼名を和一と称し、尚道軒と号した。

芳武もまた、江戸で10数年間剣術の修業を積んだ後、水戸藩に抱えられ50人扶持の上士に列せられた。しかし、明治4年（1871）に廃刀許可令、さらに同9年に廃刀令が出され、剣術は衰退をたどることになった。

明治11年（1878）40歳の時、江戸における剣術に見切りをつけて故郷の清久に帰り、ここで郷村子弟の指導にあたった。旧幕時代、あれほど脚光を浴びていた剣術も衰退の兆候が益々強まる中で、地方ではまだ愛着を持つ者も多かった。当時の起請文^{おししょうもん}には、誓詞血判をした門人が約200名も数えられており、これを明確に裏付けている。

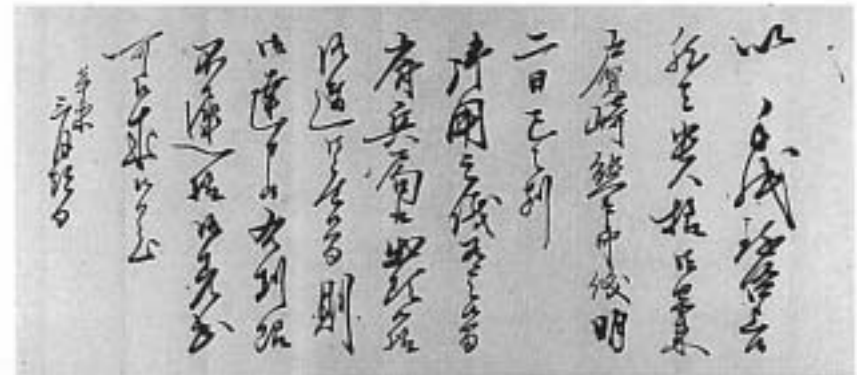
しかし、こうした状況下の中で、芳武は剣術に希望を失ったのであろう。明治40年（1907）4月3日、切腹して自らの命を断った。享年69歳、法名は「常照院実山立体居士」という。



11 剣道私塾二付願書

（明治4年）（1871）

士族触頭今川得太郎は、家来の芳武が従前通り剣道教授並びに私塾を經營できるよう東京府に願い出たものである。



12 戸賀崎熊太郎府兵局へ出頭二付書状

（明治4年）（1871）

4代戸賀崎熊太郎芳武が、府兵局へ出頭するようにとの達しである。明治維新の混乱で治安の悪い時に、東京府下の警察活動に関与したことがわかる。このことは、芳武の力量を府兵局も認めていたといえる。

5 代戸賀崎熊太郎^{きよつね}清常



5代清常の眠る先祖代々の墓

戸賀崎熊太郎清常は慶応元年（1865）1月19日、芳武の長男として生まれた。幼名を保之進と称し、好道軒と号す。

戸賀崎家剣5代として父の跡を継ぎ、上清久の道場を主宰した。しかし、こと志と違うためか不遇な日々を送り、初代熊太郎暉芳から150年に渡り続いてきた神道無念流宗家としての戸賀崎道場は、ついに大正中頃、5代熊太郎清常をもって閉じられた。

大正10年（1921）4月15日、57歳で病没し、ここ東明寺久喜来光院に眠っている。法名は、「常法院春山清澄居士」という。

戸賀崎家一門の主な高弟達

神道無念流は、江戸時代後期に存在した剣術の流派中、北辰一刀流や直心影流などとともに多くの有名剣客や俊英を輩出した。

初代熊太郎暉芳の門下からは、松村源六郎（志多見村・現加須市）や岡田十松（砂山村・現羽生市）、三田三五郎（持田村・現行田市）、白石兵左衛門（西大輪村・現鷺宮町）などが出た。暉芳の後継者として剛腕を発揮した岡田十松の門下からは、水戸藩の重臣藤田東湖、三河国田原藩の家老渡辺峯山、伊豆の代官江川太郎左衛門、練兵館主宰者斉藤弥九郎、新撰組隊長芹沢鴨、秋山要助（箱田村・現熊谷市）、烈公に仕えた金子健四郎など、多士済々である。神道無念流が初代熊太郎暉芳の努力によって、武蔵国の東部及び北部一帯に伝播したのにつづき、岡田十松のもとには旗本や諸藩の藩士、武芸指南役まで入門してくるようになり、日本全国にその名が知られるようになった。

2代胤芳の門下からは、中村万五郎（東方村・現越谷市）、木村定次郎（堤村・現桐生市）、大木伍兵衛（不動岡村・現加須市）、清水八右衛門（八甫村・現鷺宮町）などで、大木伍兵衛は書と剣にすぐれ、門人175名によって加須市の竜蔵寺境内に立派な頌徳碑が建立されている。

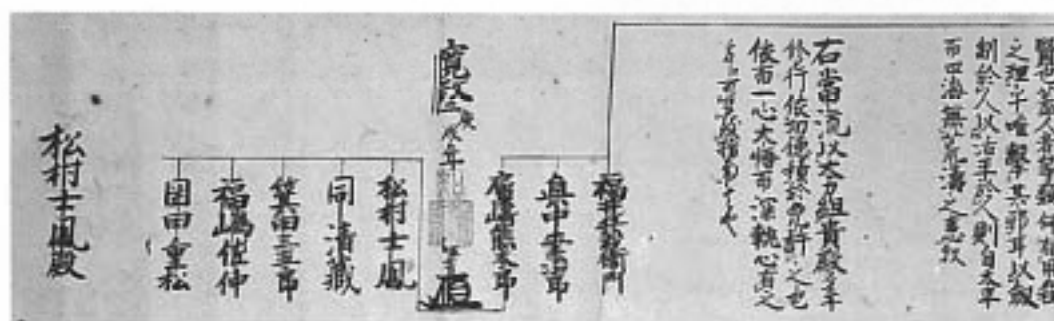
3代芳栄の門下からは逸見熊次郎（藤塚村・現春日部市）、渡辺邦蔵（西大輪村・現鷺宮町）、奥沢梅次郎（油井ヶ島村・現加須市）、野上勘兵衛（礼羽村・現加須市）などが出た。また、芳栄は水戸藩との関わりも深く、剣術の指導のほか、多くの藩士と交わり国事に奔走した。

4代芳武の門下からは、川島兵庫（松永村・現栗橋町）や奥沢市蔵（油井ヶ島村・現加須市）などをあげることができる。芳武もまた水戸藩に抱えられ、多くの水戸藩士を指南した。



32 岡田十松吉利の墓 中野区・宝泉寺

岡田十松吉利は明和2年（1765）、砂山村（現羽生市）に生まれ、はじめは松村源六郎に師事したが、後に暉芳の弟子となった。師の暉芳が帰郷するにあたり裏二番町の道場を譲られ、その後神田猿楽町に移し「撃剣館」と称して教授した。水戸藩と深く関わり、多くの有名剣客を育てたことで知られる。文政3年（1820）8月15日、撃剣館で他界した。法名は「大休院実翁道参居士」という。



33 神道無念流免許皆伝書（松村士鳳）寛政2年（1790）

初代暉芳から松村源六郎勝芳（松村士鳳）に与えられた免許皆伝書である。

松村源六郎は寛保元年（1741）5月14日、志多見村（現加須市）に生まれ、父の跡を継ぎ名主、代官となった。また、彼は剣術家としてだけでなく、俳人建部涼袋に入門して俳諧を学び、「士鳳」と号して俳名をうたわれると同時に、華号を「友嘉」といい華道にも優れていた。『俳諧集』や『東都日掌記』などの著書もあり、まさに稀代の文化人であった。



31 神道無念流免許皆伝書（岡田十松）寛政2年（1790）

初代戸賀崎熊太郎暉芳から岡田十松吉利に与えられた免許皆伝書である。



35 中村万五郎政敏

天明5年(1784)11月26日、東方村(現越谷市)に生まれ、有道軒と号した。幼い頃から剣術を好み、清久の戸賀崎道場において初代熊太郎暉芳と2代胤芳に学んだ。享和元年(1801)、18歳で初伝の印可を許され、諸国武者修業に出立。著名剣士と交遊の後、故郷東方村に戻り道場を開設して多くの門弟を育成した。

有道軒の号は師胤芳から贈られたものである。



36 有道軒先生碑拓本

中村万五郎政敏の遺徳を偲んで、大聖寺(越谷市)境内に建立されたものである。碑の裏面には、147人の門弟名が刻まれている。

38 川島兵庫政剛

嘉永6年(1853)7月21日松永村(現栗橋町)に生まれ、号を弘道軒と云った。幼い頃から父について家伝の神道無念流を学び、後に江戸小石川の4代芳武に入門し、10年で免許皆伝の印可を受けるに至った。また、剣術修業の傍ら砲術を鹿兒島の浪士神田湊に、捕流軍学を笠間藩士大塩正路に学んだ。さらに、直心影流の剣士とも交流をもち、山岡鉄舟の道場にも出入りをして剣法を講義した。山岡鉄舟は川島兵庫の剣技と人柄に感嘆して、「剣帯士」の号を贈っている。



37 逸見先生遺剣之蔵碑拓本 明治10年(1877)

逸見熊次郎福演の3回忌の折、長男の逸見孝源長徳と門人たちが師の遺徳を称え、建立したものである。

熊次郎福演は文化10年(1813)藤塚村(現春日部市)に生まれ、思道軒と号した。はじめ中村万五郎に師事して初伝の印可を受け、後に3代芳栄に学び奥伝の印可を受けた。天保14年(1843)には屋敷内に道場を設け、多くの門弟を教導した。また、幕末の「戊辰の役」では官軍の先導に当たり土賊を鎮圧し、政府の表彰を受けている。

神道無念流と水戸藩



水戸藩主 徳川 斉昭

寛政12年～万延元年（1800～60）。諡は烈公。

藩校弘道館を設立して人材教育に当り、館内には大演武場を設けて、剣道に一段の力を注いだ。朱子学的な尊攘的行動が幕府にきらわれ謹慎の身となったが、後に許された。將軍の継嗣問題では、大老井伊直弼と対立して幽居の身となった。

15代將軍徳川慶喜は、斉昭の子。

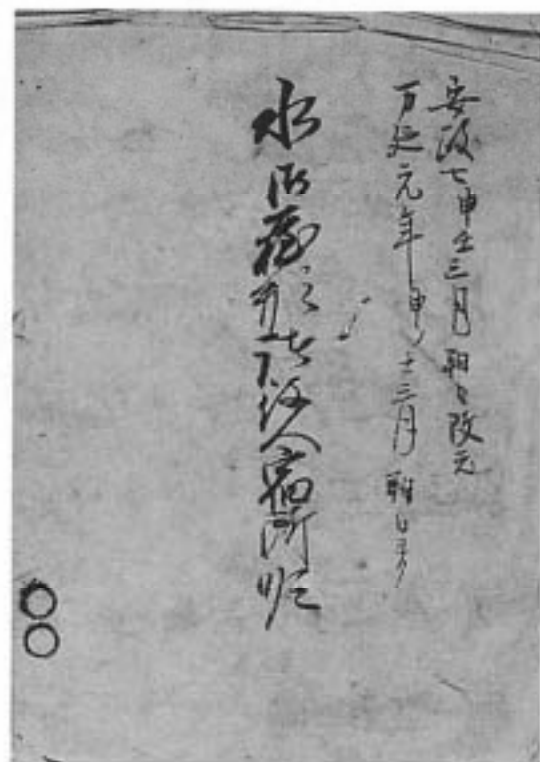
水戸藩主烈公德川斉昭は、文武不岐の精神にもえ、剣道については特に意を用い、大々的に武芸を奨励した。烈公は藩の指南役として天下有数の剣客を水戸藩に招致し、その第一人者が北辰一刀流の千葉周作と神道無念流の岡田十松であった。当時、無数の流派が存立するなかで、神道無念流が水戸

藩公認とされたことは、同流がいかにも一級品であったことからは想像に難くない。

戸賀崎家一門には、この岡田十松の外に3代熊太郎芳栄をはじめ多くの剣士が水戸藩に招かれている。3代芳栄、4代芳武は何れも剣技教授として水戸藩士と交流をもち、殊に芳栄は烈公の厚遇を受け、山野辺・武田・藤田の諸士たちとも親しく、藩論を動かすほどであった。この武田耕雲斎と藤田東湖らは、当時水戸藩を牛耳った士であり、何れも神道無念流の達人といわれた。

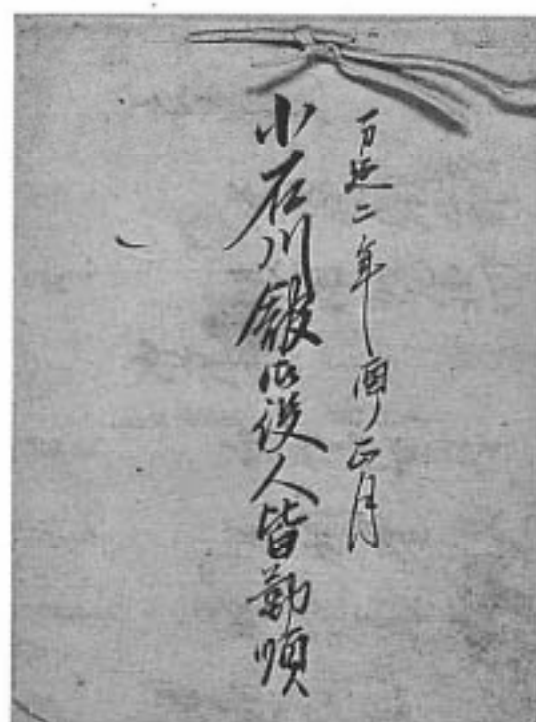
幕末三大道場の一つ練兵館主宰の斉藤弥九郎は、十松の高弟であり、藤田東湖とは同門であったことから、その親しさは格別であり、水戸藩指南に招かれている。弥九郎は剣技もさることながら、万事に通じた兵法家であり、論客でもあったといわれる。斉藤道場練兵館からは、桂小五郎、高杉晋作、渡辺昇などの維新の俊傑がぞろりと輩出した。

画家として華山に絵を学んでいた斎藤門下の剣豪金子健四郎もまた、水戸藩に抱えられ藩士となった。後に小石川の藩邸詰めとなって烈公の側近として活躍した人物である。武田耕雲斎の率いる天狗党にも参加したが、京都への道すがら不幸にも病没した。



40 水御屋形諸役人宿所順 万延元年（1860）

3代戸賀崎熊太郎芳栄が水戸藩主烈公德川斉昭の求めに応じて仕官し、後の交友関係を示すものであり、老中岡田信濃守、武田修理をはじめとする諸士の住所録と思われる。武田修理は、天狗党の総大将となり、尊皇攘夷の素志を朝廷に訴えんとした武田耕雲斎その人である。

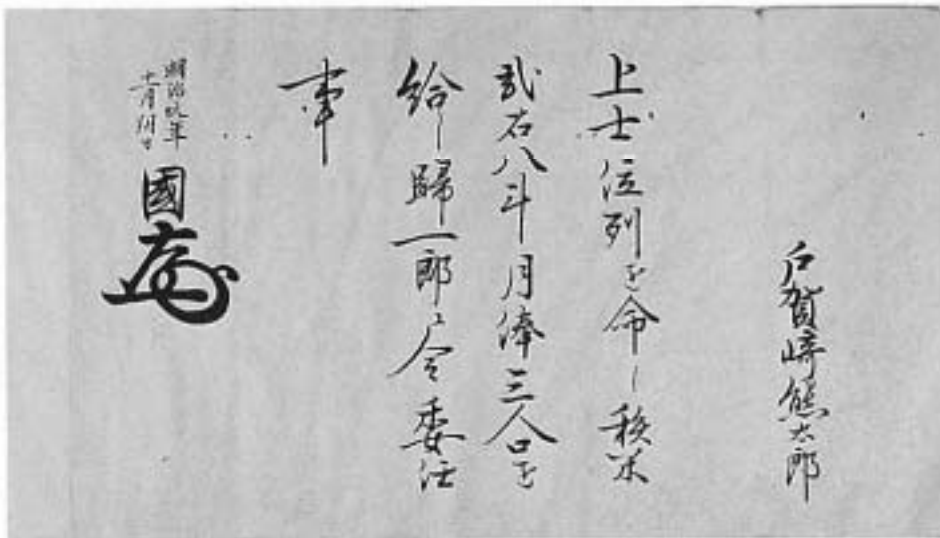
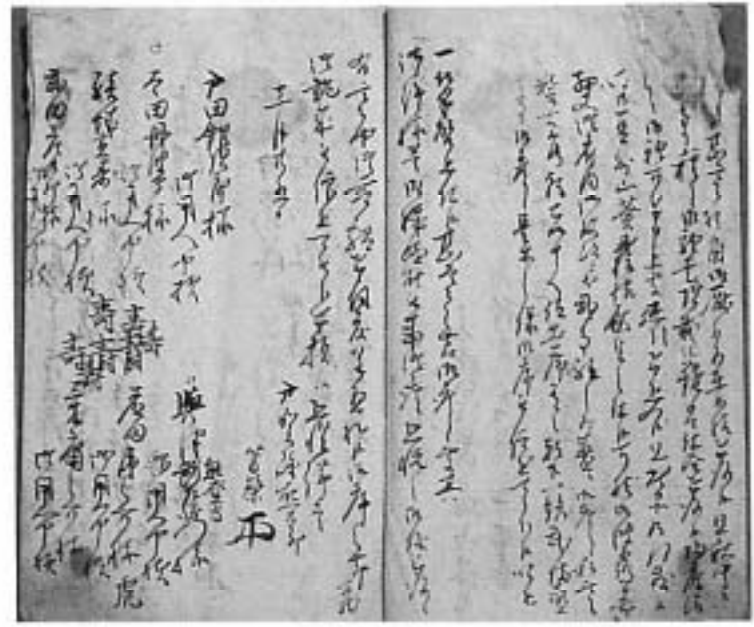


41 小石川館御役人皆勤順 万延2年（1861）

水戸藩の小石川館（水戸藩上屋敷）へ出仕している藩士の住所、役職名、氏名を記したもので、3代芳栄が残したものである。

47 水府文通留

3代戸賀崎熊太郎芳栄と水戸家諸藩士との文通の記録（控）である。相手方は、「水御屋形諸役人宿所順」「小石川館御役人皆勤順」などに出てくる有力な藩士である。



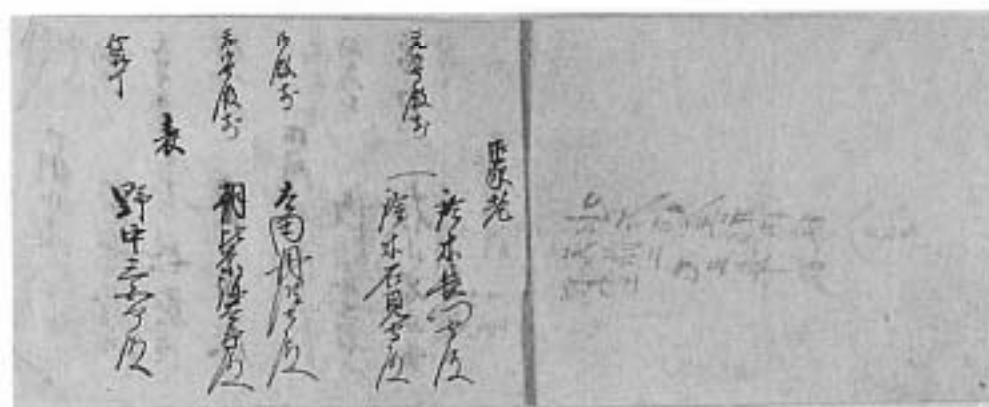
43 上士下知書 明治元年（1868）

4代戸賀崎熊太郎芳武が水戸藩より上士に列せられ、秣米貳石八斗月俸三人口を給せられたことを示すものである。



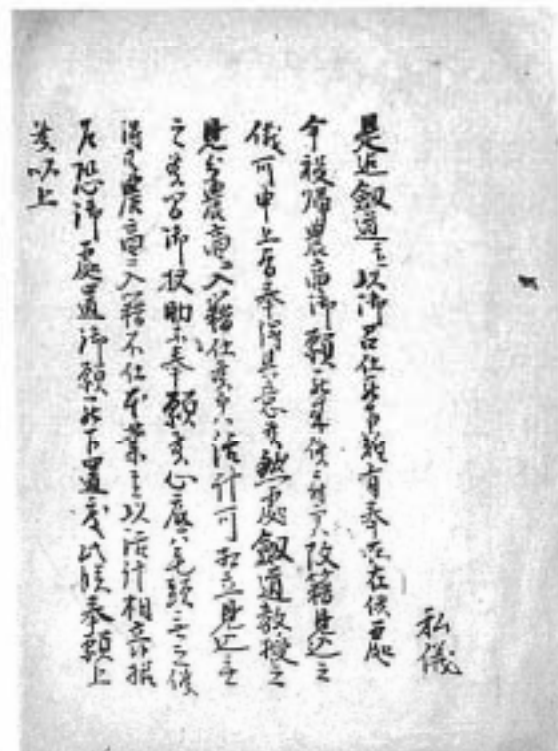
44 劍技教授補任書（明治元年）(1868)

4代戸賀崎熊太郎芳武が水戸藩より世子小伝兼劍技教授に補せられたことを示すものである。



42 水戸御屋形御役人名前 元治2年（1865）

3代芳栄と水戸藩士との交友関係を示すものであり、家老職をはじめとする諸士の住所録と思われる。この資料には朝比奈弥太郎の名が見えるが、彼は天狗党と諸生党の対立抗争の際、市川三左衛門と共に諸生党の指導者となった者である。



45 水戸家出入願 明治2年（1869）

明治維新の大混乱に際して、烈公德川齊昭の頃からの関係も深いので、水戸家への出入りを是迄通り認めてほしいというものである。

展示資料目録

番号	資 料 名	年 代	出 典・文書番号
	神道無念流と戸賀崎家 〈福井兵右衛門と戸賀崎熊太郎〉		
1	神道無念流免許目録	宝暦10年(1760) 正月	戸賀崎恵太郎家 3
2	神道無念流免許皆伝書	宝暦13年(1763) 正月	戸賀崎恵太郎家 10
3	福翁府君神道碑 〈戸賀崎家剣代々〉	天明8年(1788) 10月	戸賀崎恵太郎家
4	天明復讐実録	天明4年(1784) 4月	戸賀崎恵太郎家 6
5	戸賀崎和一後見二付書状	文化13年(1816) 10月	戸賀崎恵太郎家 11
6	知道軒戸賀崎氏衣幘蔵碑	文政7年(1824) 5月	戸賀崎恵太郎家
7	花押選定二付	文政11年(1828) 3月	戸賀崎恵太郎家 14
8	花押選定二付	天保12年(1841) 4月	戸賀崎恵太郎家 17
9	神道無念流剣術免許弁解	慶応3年(1867) 12月	戸賀崎恵太郎家 35
10	今般御官職被為免候二付願書	明治3年(1870) 10月	戸賀崎恵太郎家 94
11	剣道私塾二付願書	(明治4年)(1871) 正月	戸賀崎恵太郎家 96
12	戸賀崎熊太郎府兵局へ出頭二付書状	(明治4年)(1871) 3月	戸賀崎恵太郎家 41
13	道場敷地借用二付一札	7月	戸賀崎恵太郎家 77
14	神道無念流ノ心得	年月不詳	戸賀崎恵太郎家 64
15	神道無念流免許皆伝系譜	年月不詳	戸賀崎恵太郎家 122
16	初代戸賀崎熊太郎暉芳肖像		戸賀崎恵太郎家 129
17	2代戸賀崎熊太郎胤芳肖像		戸賀崎恵太郎家 130
18	3代戸賀崎熊太郎芳栄肖像		戸賀崎恵太郎家 131
19	4代戸賀崎熊太郎芳武肖像		戸賀崎恵太郎家 133
20	5代戸賀崎熊太郎清常の墓		東明寺久喜来光苑
21	神道無念流戸賀崎氏錬武遺跡		戸賀崎恵太郎家
22	一本杉の碑 〈門人・道場関係〉		
23	神道無念流演武場壁書	年月不詳	戸賀崎恵太郎家 128
24	起請盟文	嘉永元年(1848) 4月	戸賀崎恵太郎家 22
25	起請盟文	明治20年(1887)	戸賀崎恵太郎家 107
26	御奉公願	12月	戸賀崎恵太郎家 75
27	地代金取極一件	安永5年(1776) 3月	戸賀崎恵太郎家 4
28	演武場授業請度願	明治2年(1869) 3月	戸賀崎恵太郎家 87
29	修道館奉行下知書	明治2年(1869) 7月	戸賀崎恵太郎家 88
30	旅行二付許容願	明治2年(1869) 9月	戸賀崎恵太郎家 90
	戸賀崎家一門の主な高弟達		
31	神道無念流免許皆伝書(岡田十松)	寛政2年(1790)	埼玉県立文書館所蔵岡田家文書 4
32	岡田十松吉利の墓		東京都中野区・宝泉寺
33	神道無念流免許皆伝書(松村士鳳)	寛政2年(1790)	加須市・松村 元家
34	松村源六郎勝芳の墓		加須市・地藏堂
35	中村万五郎政敏肖像		越谷市・中村穎司家
36	有道軒先生碑拓本		越谷市・中村穎司家
37	逸見先生遺剣之蔵碑拓本	明治10年(1877)	春日部市・逸見孝太郎家
38	川島兵庫政剛写真		栗橋町・川島 晋家
39	川島兵庫記徳碑除幕式		栗橋町・川島 晋家

番号	資 料 名	年 代	出 典・文書番号
	神道無念流と水戸藩		
40	水御屋形諸役人宿所順	万延元年(1860)3月	戸賀崎恵太郎家 25
41	小石川館御役人皆勤順	万延2年(1861)正月	戸賀崎恵太郎家 27
42	水戸御屋形御役人名前	元治2年(1865)	戸賀崎恵太郎家 32
43	上士下知書(芳武)	明治元年(1868)11月	戸賀崎恵太郎家 82
44	剣技教授補任書(芳武)	(明治元年)(1868)12月	戸賀崎恵太郎家 56
45	水戸家出入願	明治2年(1869)11月	戸賀崎恵太郎家 91
46	水戸家家臣辞職二付	(明治3年)(1870)10月	戸賀崎恵太郎家 55
47	水府文通留	年月不詳	戸賀崎恵太郎家 81
48	扶持引上成事	年月不詳	戸賀崎恵太郎家 116
49	徳川斉昭肖像		大洗町・常陽明治記念館
50	藤田東湖肖像		茨城県立歴史館
51	武田耕雲斎肖像		茨城県立歴史館
52	水戸藩校 弘道館		水戸市役所観光課

協力者及び機関(敬称略・順不同)

川島 晋 戸賀崎恵太郎 中村穎司 逸見孝太郎 松村 元
 茨城県立歴史館 埼玉県立文書館 常陽明治記念館 水戸市役所観光課
 東明寺来光苑 地藏堂 宝泉寺

公文書館利用案内

開館時間 9:00~17:00
 休館日 土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始
 (企画展開催中は、日曜日も開館します)
 交通案内 JR宇都宮線、東武伊勢崎線
 久喜駅西口下車徒歩17分(市役所西側)

発行・平成9年8月 編集・久喜市公文書館 〒346 久喜市下早見85-1 ☎ 0480-23-5010

(この図録は再生紙を使用しております。)

暉
芳
韻

